

東風見聞録

平成18年12月発行 通巻第16号
イーストウインドプロダクション
<http://www.east-wind.jp/>

巻頭コラム 課外授業～ようこそ先輩～の収録にて 田中正人

NHKの「課外授業～ようこそ先輩～」の収録が無事に終わった。小学生相手に丸々2日間授業を行なうということでも神経を使い疲れたが、最終的には子供たちから元気をもらったように感じた。子供の元気さは昔も今も変わらないものだ。

この話をいただいたとき、今時の子供たちにアドベンチャーを教えるのは面白いと思ったが、打合せを進めていくと、「危険なことはできない」「野外活動はちょっと...」「学校の敷地内でやりたい」「できれば体育館で...」とこんな具合になり、これではアドベンチャーレースは伝えられないと思い始めた。しかも、元プロボクサーの赤井英和さんが授業を行なったときには子供たちにスクワットをやらせ、それで腰を痛めた子が出たことを某新聞社が問題視したことなどまで聞かされた。ここまで聞かされると逆に腹が立ってきて、できる範囲でやってやろうという気になった。今の社会は何かオカシイ。



今回の舞台となった志木市立志木第三小学校

26年ぶりの母校は建物自体は変わっていないがかなり改装され綺麗になっていた。それでも先生方は「保護者の方からはもっと綺麗にしろと言われるんですよ」と、かなり保護者に神経を使っていることがうかがえた。また、先生は生徒には男女関係無く「さん付け」で話すらしい。さらに生徒会長とか学級委員といった目立つ役割も作っていないそうだ。生徒を平等に扱うためらしいが、これも保護者からいろいろ言われた末の結果なのだろうか。校庭の朝礼台から子供が落ちて怪我をしたときは、危ないから朝礼台を無くしてほしいと言われたそうだ。さすがにそこまでは認めなかったそうだが、近頃の親の過保護ぶりは相当なものだと思知らされた。このままでは階段も危ないからエレベータにしるとか言いかねない。そこまではいかないにしろ、そんな状況下で子供が育てられていたら日本の未来は無いなとさえ感じた。



授業風景。カメラに囲まれ子供たちは緊張気味

さて、実際の子供たちはというと、自分が小学6年生のときを思い起こして比べてみると随分大人びた思考があることが気になった。自分の短所を「場の空気が読めない」と言っていたり、チームで話し合いをさせても「自分の意見を主張することは、疎まれたり後々人間関係が面倒になるから」といって大人しくしている子も少なからずいた。私が小学6年のときはまだ取っ組み合いの喧嘩をしていたのに。

それにしても、こんな希薄な人間関係では真のチームワークを作ることは出来ない。私は今回の授業のテーマを【自分に厳しく、他人に厳しく】としていた。表面だけの優しさからは何も生まれてこない。本音でぶつかり合ってこそ相手を信頼できるようになるものだ。

しかし、授業では嬉しい意外さもあった。97年のレイドゴロワーズ・南アフリカ大会で、足を痛めてペースが遅くなっているメンバーと、もっと頑張れと言って喧嘩を始めた私のテレビ放送シーンを見せた感想を聞いてみたときだ。これは私のやり方の未熟さを示したもので、クラスの全員が私のまずさを指摘すると思っていた。案の定、「がんばっている人が可哀想」「遅い人の事をもっと考えるべき」「言い過ぎ」という意見が出たが、「遅い人がチームの足を引っ張っているんだから、がんばるべき」「もっと事前のトレーニングをすれば、こんな事は起きない」という意見の人が5人もいた。正直、小学生がそんなふうにするのに驚いた。その中の一人は収録翌日に行なわれた校内マラソンで優勝し、毎朝校庭を一人で走っていることを後日知った。



自分に厳しくできる人は他人にも厳しくできる。逆に自分に甘い(または自信のない)人は他人に厳しくできない(=表面的な優しさでの付き合いしかできない)のだと思う。ここでの他人に厳しくするということは、「チームとして結果を出すには」ということに主眼を置き、自分や相手の主観的な面に趣きを置かないということである。目的を持ったチームならば、それを達成できるように導くことが真の相手に対する優しさであると思う。こうしたことを2日間の授業で感じ取ってもらえたのだが、どこまで生徒に伝わったのか自信がない。今わからなくても大人になって思い起こしてもらえれば幸いだ。

人は社会の中で生きている。それは常に何かに所属していることになる。家族であり、クラスであり、クラブだったり、学校であったりする。そうしたチームという概念を意識することは生きる上で強い動機付けとなる。仲間がいることは個人が挫けない力を持つし、チームがより良いものとなるにはという客観的な思考ができれば、個人の悩みなどは小さなものを感じるだろう。

実際、海外レースに参加すると「日本」という国や国民性を意識するようになる。レース中にあるアメリカチームに「ジャップ」とバカにされたときは、マレーシアのチームに「あんな奴らは気にするな」と励まされた。このときはアジアの一員であることを初めて意識した。これはとても大きな勇気と希望になって嬉しく感じたものだ。より大きな枠での所属(チーム)意識は、人の思考範囲を広げ、個人の主観的な悩みを小さなものとする。それが強い人間になる秘訣だと思う。子供たちには、まず身近なチーム意識から取り組んでもらいたいものである。



課題に取り組む子供たち

また、今の教育現場に少し触れて感じたことがある。今話題のいじめ問題にしても、「いじめは犯罪だ」「いじめっ子がとにかく悪い」といった子供に責任を問う議論も多いが、その前に大人はどうか?といつも考えてしまう。社会全体にいじめの構造があって、権力のあるものが腐敗している世の中で、はたして子供たちに責任を問うことができるのであろうか?それよりも、大人たちが立派な姿を見せるべきではないのか。

未来の社会を支えるために子供たちにもっと自然体験をさせようということが盛んになりつつあり、それはとても結構なことだと思う。しかし私はアドベンチャーレースを通して大人たちに冒険をしてもらい、勇気と自信に満ちた姿を子供たちに見せて欲しいと願うばかりだ。



志木第三小学校の6年4組のみんな

『課外授業～ようこそ先輩～』

各界の第一線で活躍する人々が出身校である小学校を訪ね、その専門とする世界と自らの人生について授業し、後輩の子どもたちに熱いメッセージを送る…。落語家、芸術家、スポーツ選手、哲学者など、ジャンルを問わず第一線で活躍する人々が多彩な授業を繰り広げる。(公式HPより抜粋 <http://www.nhk.or.jp/kagaijugyou/>)

田中正人 放送予定日

平成19年1月13日(土)09:30NHK総合 / 平成19年1月14日(日)08:05NHK教育(再放送)

この番組制作にあたり、私を強く推薦し、内容を一緒に考え、そして今なお編集に尽力して下さっている番組制作会社駿の酒井智代様、丸山雅也様、そしてスタッフの皆様にご心より感謝いたします。

田中正人

10月19日 救急事態に備えての搬送トレーニング

今年の里山アドベンチャーで滑落事故が発生した。事故者はアドベンチャーレース初心者ではなかったものの、スタッフが想定していなかったコースを通り、急斜面を約30m滑落。事故にすぐ気付いた後追いスタッフが現場に急行し、状況を本部に連絡。消防隊員、警察の山岳救助隊と共にレースディレクターの田中正人、大会医療班(看護師)をはじめ大会スタッフが駆けつけた。今回の後追いスタッフや無線機連絡体制の充実により、事故現場をすぐに特定できた。さらに、事故直後に付近にいた他チームがレースを中断し、負傷者の応急処置、救助隊の事故現場への案内など救助に尽力してくれた。搬送は消防隊の判断により



ヘリコプターを呼んでの救助となったが、それまでの参加者、大会スタッフ、消防、警察のそれぞれ素晴らしい協力と連携により迅速な救助が行なえた。

もちろんイベントは事故がないのが大前提である。だがアドベンチャーレースは自然が相手。自分たちではコントロールできない事もたくさんある。「もしあの時ヘリコプターが救出できないような状況だったら…」以降、スタッフたちの議論が始まった。

そして10月19日、医療班と共に搬送トレーニングを行った。当日は里山アドベンチャーのスタッフ(カバクラブスタッフ)と、実際に里山アドベンチャーで活躍してくれた看護師の八田京子さん、森本深青子さんもトレーニングに参加。ケガ人役のスタッフをバックボードに括り、事故現場から救急車が入れる林道まで搬送を行なった。道もなく足場の悪い山中をヘリ救助とほぼ同じ時間で搬出できた。

事故はあってはならない。しかし自然と対峙しているアドベンチャーレースは、何があるか分からない。もしもの場合に備え、里山アドベンチャースタッフは今後とも対処トレーニングを重ねていく方針である。

10月21日 KOCCi里山アドベンチャー・リベンジ講習会

今年の里山アドベンチャーはナビゲーションの難易度が高く、競技性の強いレースとなった。従って多くのチームが難所となるCP7からCP12のトレッキングセクションで苦労した。

しかしこのまま「できなかった」で放置するのは前進にならない。特にナビゲーションに泣いたチームは来年のためにも再度地図読みを練習する必要がある。よって同コースを講習に取り入れ、再挑戦講習会を開催した。

この頃のみなみ町は紅葉の季節。少し山奥へ行くと赤や黄色の葉が美しい。若干汗ばむ陽気でコンディションがいい。参加者はレースで出したタイムよりずっと早く到着することができた。



11月6日~9日 初動負荷トレーニングin鳥取



初動負荷理論の勉強と実践トレーニングのために鳥取市のワールドウイングというスポーツジムにて4日間の合宿を行なった。身体の使い方を根本的に直していくような理論であるため戸惑いもあったが、時間をかけて体得していきたいと思っている。

初動負荷理論…反射の起こるポジションへの身体変化及び、それに伴う重心位置変化等を利用し、主働筋の「弛緩 伸張 短縮」の一連動作を促進させると共に、その拮抗筋ならびに拮抗的に作用する筋の共縮を防ぎながら行う運動(ウェブサイトより抜粋)

(左写真: 今回一緒したチームテイケイの方々と)

山と溪谷 連載がいよいよスタート

山と溪谷(山と溪谷社)1月号より、いよいよ田中正人の連載がスタートする。山岳での事故が相次ぐ昨今、田中がアドベンチャーレースの経験から得た登山方法をアドバイス。登山には様々なスタイルがあり、それぞれ人によって楽しみ方が違う。よって本誌の内容は「田中が物申す」ではなく、あくまでアドベンチャーレーサーの視点からのアドバイスである。自分のスタイルに役立つ情報があれば、ぜひ活用して欲しい。(連載決定にあたり、お力を頂いた山と溪谷社の山本晃市様に心より感謝いたします。)

「山と溪谷」1月号発売日: 平成18年12月15日

オリジナル自転車の製造販売 高津正明さん

東京都板橋区で自転車の製造・販売業を営む高津正明さんは、田中がアドベンチャーレースを始めた時から自転車についての相談にのってもらっている。そんな兄貴のような存在の高津さんにオリジナル自転車を販売する事の意義を聞いてみた。

乗り手の希望と溝がなくなるまで話し合って製作する自転車

田中 「高津さんにはチーム結成時からマウンテンバイク（以降MTB）のメンテナンスをお願いしているから、随分長い付き合いになりますね。自らレースに出場されてもいる高津さんですが、自転車を好きになったのはいつ頃なんですか？」

高津 「17歳の時に、自転車に乗れない友人がいて、そいつが乗れるように特訓しているうちに自転車の面白さにはまっていったんです」

田中 「卒業されてすぐにお店を開業していたんですか？」

高津 「初めはデザイン事務所に就職して自転車のデザイン・企画製造販売をしました。」

田中 「なぜ開業をしようと思ったんですか？」

高津 「もっとマニアックな自転車を作りたかった。当時事務所で作成していたものはクロスバイクみたいなものだったんです。その当時でもマニアックな物を作成していたんですが、83年にMTBが日本に入ってきて、これを見て『すごい!』と思ったんです。自分にとって斬新的なものだったんです」

田中 「一瞬で惚れたんですね（笑）」

高津 「もうやるしかないと思いましたね。そこで持っている情報を駆使して、84年に同じ考えの友人と二人でそれぞれの想いを盛り込んだオリジナルMTBを作ってみました。そしたらカッコいいバイクができたんです」

田中 「それが今のジラフのオリジナル商品にも反映されているんですか？」

高津 「はい、トップチューブの曲がったデザイン（ダウンヒルを考慮したもの）は今も引き継いでいますね」

田中 「でもその時はデザイン事務所に行ったんですよね？ じゃ作成したマウンテンバイクは世の中に出したんですか？」

高津 「まずは事務所の社長に見せたら『興味ない』と言われたんです。でも僕がマウンテンバイクを作っている事を知った知人の自転車小売店さんが、『うちで売らせてくれないか』と申し出を頂き、彼のノウハウも盛り込んで販売に至りました」

田中 「そしてGIRAFFEを開業したんですね。お店の方はどうですか？」

高津 「おかげさまで、ここ数年は新規のお客さんが増えましたね。ターゲットを絞ってマニアックな店にした事が良かったようです（笑）うちでしかないカラーを全面的に出したんです。当然マスは小さくなったけど、コアなお客さんが増えました。お客さんには『ベースがしっかりしているから信頼感がある』と言ってもらえますね」

田中 「GIRAFFEしかないカラーというのは？」

高津 「乗り手に合わせて1台ずつ制作するオーダーバイクです。メーカーもオーダーの観点から攻めて行きますから、乗り手の希望、使い勝手の良い物になります。出来るだけ既成概念を持たないようにしています。そして、安全な自転車で楽しく遊べるようにアドバイスしています」

田中 「GIRAFFEは高津さんの拘りを表現する場所なんですね」



高津 「店は私の自転車感のプレゼンテーションの場なんです。もちろんお客さんは自分なりの希望を持って来店しているわけですが、その希望との溝が埋まるまで話し合ってお互いが納得するまでぶつかるんです。だからこそ乗り手にとってベストな物に仕上がります」

田中 「流行の自転車がほしいってお客さんも来るのでは？」

高津 「流行の物だけじゃないんですが、まずどんな使い方をしたいかを聞きます。そこで『だったらこんな商品も有りますよ』と紹介し『こっちの方が良いんじゃない?』などと選択肢を広げてあげるんです。時には、悩んじゃって、最終的には売れないことも・・・（笑）」

田中 「GIRAFFEは店内に展示している自転車数がほとんどないですね」

高津 「オーダーサンプルしか置いてないですね。ウチはお客さんが希望する物にできるだけ近いバイクを用意したい。在庫を持つとそれを販売したくなるからね」

田中 「自転車って本当にいい物に乗ると、他が乗れなくなっちゃいますよね」

高津 「まずは予算を聞いて、なるべく意に適した物を用意するのが僕らの仕事だけど、欧米に比べると日本のスポーツにおける自転車文化はまだ低い。だからこそ、僕らがそれぞれの目的に合った自転車を遊び方を含めてアドバイスしてあげる事が大切なんじゃないかな」

田中 「僕たち消費者は、高くても信頼のあるお店に行きますからね」

高津 「もっと多くの人に自転車の楽しさを知ってもらえるようなバイクを作りたいんです。レース用バイクだけでなく普通の人が使えらる質の高いシティーバイクを販売まで持って行きたいんです。自転車の楽しさを知ってもらい、スポーツバイクの入り口になるような物を作るのが夢なんです」

田中 「なるほど。MTBの面白さも広げたいですね。僕は正直、アドベンチャーレースって日本人に合わないと思うんです（笑）でも日本の中にもこういうワクワクするスポーツを少なからず楽しむ人がいる。だからこそ、まだこのレースを知らない人やワクワク感を求める人のためにも、それを眠らせてはいけないと思うんです」

高津 「日本人はマジメだから始めたら極めないと気が済まない。素晴らしいことではあるけど、そこ以外にも楽しいことは山ほど有る。遊び道具なんだからもっともっと楽しんで欲しいなあ。もったいないよ〜」

田中 「自分のスタイルを確立しているからこそ、お客さんに対するスタンスに筋が通っている。だからこそ、お客さんがくるんですね。そういう僕も高津さんを信頼してるからお店に行くんですが（笑）」

高津正明(たかつまさあき)

1960年東京都生まれ。1990年に板橋にて「フィールドイクイップメントGIRAFFE(ジラフ)」を開店。チームイーストウインド結成時代よりチームのマウンテンバイクをメンテする縁の下の力持ち。

GIRAFFE公式サイト: http://www5c.biglobe.ne.jp/~gira_zt/

Adventure Racing Club KOCCI

今月の<KOCCIの顔>



高野 隆(たかの たかし)

7年前に体調を崩した。当時の私は体脂肪30%超、いわゆるメタボリックシンドロームってヤツだ。「これじゃあマズイ。娘達からも愛想をつかさされる」との思いからまず散歩を始めた。

1ヶ月続いて今度はちょっと走ってみた。2ヶ月・3ヶ月・気が付けば、半年が経ち、なんと体重は - 23kg・体脂肪も17%までに落ちていた。身体も軽く、驚くほど体力もついた。

そのノリで、フルを走った経験もないのに いきなりウルトラ117kmにエントリーをする。何とも無謀と思われるチャレンジをするも「完走」を果たすという偉業を成し遂げる。(自画自賛!?)

その年、西湖で行なわれたアドベンチャートレーニングキャンプに参加したのがきっかけとなり、x-adventure岐阜大会に参加するべく「DESERT ROSE」(デザート・ローズ)を結成する。しかし、経験不足という理由であっけなく選考漏れ。「悔しい～！今に見ておれ！」とその後は、各大学や近県主催のオリエンテーリングなどかたっぱしから参加し、西伊豆でのシーカヤックの合宿等も積極的に参加した。そしてついに念願の伊豆アドベンチャーレースに参戦し、見事上位入賞を果たす事が出来た。

その後も「DESERT ROSE」は毎年伊豆アドに参戦し、また先日の里山アドベンチャーでも5位に入賞を果たす等、固い団結力で目標に向かってチャレンジし続けている。

一方、個人的には、日課の早朝5kmのラン、夕方10kmのランと2kmのプールのトレーニングを欠かさず続けている。先日のロングディスタンス大会では1500mを22分、800mを12分で泳ぎ、表彰台のてっぺんに立てた。さらに、日本山岳耐久レースも今年で6回目の完走を数え、目下アドベンチャーグリーン(日本山岳耐久レースを10回完走した人に与えられる称号)を目指し、快走中。今年ついに50の大山に乗った私ではあるが、まだまだ宝物を探しに走り続けます。いつか全てがかけがえのない宝物だったんだと気づく日まで…



瀬瀬 聡(こうけつ さとる)

さまざまな“凄いひと”が集うKOCCIに出会ったのは、数年前、友人に誘われて参加した伊豆アドのトレーニングキャンプがきっかけだった。

それ以来知り合っていく“凄いひと”、カヤックやトレイル、マウンテンバイクなどフィールドの達人達は、それまで不摂生な生活で出不精だった自分をフィールドへと連れ出し、休日のスタイルをちょっとずつ変えていっている。

流石にその“凄い人達”のレベルとは未だ程遠いところにいるが、レースも、練習も、遊びも自分のような“なんちゃってアスリート”でも楽しめる心地よさを、これからも友人も巻き込みながら続けていきたいと思う。

昨年、知床半島を1週間かけて巡るシーカヤック・エクスペディションに参加し、そこで出会った先達の“凄いひと”曰く、「ほとんどの人は、本来持っているはずの冒険心に気づかないまま過ごしてしまっている」らしい。



コロニアスポーツウェア



ザ・ノース・フェイス



SUUNTO



PRO TREK

アドベンチャーレーシングクラブKOCCIは以上の皆様から応援を受けています！(スポンサー企業募集中)

発行元: イーストウインドプロダクション 田中正人・竹内靖恵)

群馬県利根郡みなかみ町鹿野沢637-M302 TEL&FAX 050-3303-3808

<http://www.east-wind.jp> info@east-wind.jp